

紹介

李景漢著、能久屋德美譯

「農村家庭人口の統計的分析」

民國十八年北支那に於ける定縣實驗縣の社會調査である「河北省定縣社會概況調査」が發表され、支那に於ける從來の同種報告書に比較して極めて優れた正確なる資料として定評のある所である。その著者は燕京大學教授にして農村社會學者として令名ある李景漢氏が、同地域に於ける農村家族に就いて人口統計的な觀察をなして發表したのがこの資料である。

譯者も云ふ如く彼の手法は必ずしも十全ではなく、包括的に過ぎて平面的解明に終る憾みがあるといふ。素よりこの小論では彼の社會調査の方法論の一端すらも窺知することは困難であるが、從來の支那に於けるあらゆる報告書の「たよりなき統計數字」が、彼に於てより確實化されようとし、その努力に非常な注意を拂ひつゝあるのは多とすべきである。

自ら言ふ如く「支那の農民は人口調査に對してすべて疑を懷き、従つて可能なる範圍内でことごとく虚報する。彼等はそれが上税加捐と關係あらんことを恐れ、徴兵拉夫と關係あらんことを怕れる。この外にも尙幾多の色々な不思議な懷疑があつて、調査を缺陷不備あらしめ、或は表面完全のやうでも内容を不確實ならしめる。」ことが、既存の調査資料をして信憑なからしむる重大な原因である。とすれば、支那の如き不安定な農村社會に

李景漢著能久屋德美譯「農村家庭人口の統計的分析」

於ける資料蒐集の困難さは思ふべく、そのために、一、農民の信頼を得ること、二、調査員を正しく選擇訓練することにより種々の障害を克服して民國十九年に實施したものである。調査村七十二箇村中七箇村が材料不整備のため六十五箇村五千二百五十五家三〇、六四二人を取扱つてゐる。定縣は純粹な農村社會であつて北支那の常態的な農村家族を知るには洵に好個の資料といふべきである。

先づ家族構成員の數によつて家族の大小を計ると平均一家族五・八人となる。これは大家族制度論者の主張と必ずしも一致してゐない。こゝに云ふ家族の意味は「一切の共同生活をなしてゐる人口を包括して云ふ。但し傭工及び同居人は計算の内に入れない。凡て本家と密接な經濟關係を有し、而して親屬關係ある者は、たとへ家に在らずとも計算する時にはその内に包括する。」のであつて、血縁關係者にして、經濟を共にするものだけを家族員と見做し、使用人を含めないのが、問題は血縁關係者の大家族の有無といふことになるが、かゝる例は全戸數の〇・九二%に過ぎず一家族四人をモードとしてゐる點に注意したい。

五、二五五家、家庭の大小

民國十九年

全家人口數	家數	家數百分比	人口總數
一	一九四	三・六九	一九四
二	四〇二	七・六五	八〇四
三	六七五	一一・八四	二、〇二五
四	八五二	一六・二一	三、四〇八
五	七七八	一四・八〇	三、八九〇
六	六六六	一二・六七	三、九九六
七	五三四	一〇・一六	三、七三八
八	三二九	六・二六	二、六三二
		五九	

九	二一四	四・〇七	一、九二六
一〇	一五九	三・〇三	一、五九〇
一一	一三〇	二・四七	一、四三〇
一二	八五	一・六二	一、〇二〇
一三	六三	一・二〇	八一九
一四	四三	〇・八二	六〇二
一五	二六	〇・四九	三九〇
一六	一六	〇・三〇	二五六
一七	一六	〇・三〇	二七二
一八	一一	〇・二一	一九八
一九	一四	〇・二七	二六六
二〇	一一	〇・二一	二二〇
二一	七	〇・一三	一四七
二二	六	〇・一一	一三二
二三	八	〇・一五	一八四
二四	一	〇・〇二	二四
二五	二	〇・〇四	五〇
二六	三	〇・〇六	七八
二七	三	〇・〇六	八一
二八	二	〇・〇四	五六
二九	一	〇・〇二	三〇
三〇	一	〇・〇二	三七
三一	一	〇・〇二	三九
三二	一	〇・〇二	四三
三三	一	〇・〇二	四五
三六	一	〇・〇二	六五
四三	一	〇・〇二	六五
四五	一	〇・〇二	六五
六五	一	〇・〇二	六五
總 合	五、二五五	一〇〇・〇〇	三〇、六四二
平均每家	五・八

然し家族内に含まれる親屬關係には可成り複雑なものもある。總人口三

〇、六四二人中男家主及其の妻、女家主、未婚の男子及女子を合して一六、四三三人で總人數の五四%を占めこれは一戸當り三・一人となり所謂歐洲の小家族的性質を示すもので、この外四六%が、その他の親屬關係者である。その親屬關係者中には既婚男子二、四三〇人、その妻二、三九三人となり兩者が一六%を占めてゐる。親屬關係を示す名稱は五十六種ありその複雑性を表す。

次に家族内の性別の割合は既存の報告によると種々高低があるのは調査の不確實さに因るのであり、李景漢は「農村人民が年頃の婦女を瞞つて眞實を報告するのを肯じなかつた」のに原因するといふ。

この調査に於ては性比率女子一〇〇に對して男子一〇六・二であり、男子五一に對して女子四九となり、その割合の差はそれほど顯著ではない。年齢構成は調査地域が比較的安定せる農村であるので、年齢別階級は下より上へ漸次縮小してゐる。即ち人口移動による生産年齢層の他出の少ないことを示してゐるといふべきである。彼は年齢構成より人口の増減趨勢を推定して、十五歳未満と一五歳以上四九歳五〇歳以上の三類の割合を比較して一五―四九歳が五〇%を占め、一五歳未満三三%、五〇歳以上一七%となつてゐるのは、この地域に於ける人口の停滞性を示すものであるとしてゐる。

婚姻の状況については全人口の既婚未婚の年齢別をみると男子は二十歳未満と、二十歳以上七十七歳までの男子に未婚者の多いのは注目すべく、女子は二十二歳以後に於ての未婚者は極めて少く、これは女子は大體嫁出するが、男子は經濟的な理由で配偶者を娶る餘裕なく、了るものが多いためであるといふ。

婚姻は可成り早婚のものもあり、九歳の男子、十二歳の女子が有配偶者と

なつてゐる。これは、よく支那の家族にみられる童養媳と稱して、子の嫁を早くから決定してゐる例ではなく正真正銘の正式結婚であると特に断つ

てゐるやうに、相當早婚の部に屬するものもあり、女子は男子に比較して遅いと云へる。

五、二五五家人口の年齢組に照した未婚及び既婚男女人数及びその百分比

民國十九年

年齢組	未婚		既婚		未婚		既婚		百分比
	男	女	男	女	男	女	男	女	
五歳以下	一、九四二	一、八六〇	三、八〇二	—	—	—	—	—	—
五—九	一、七三三	一、五八五	三、三二八	—	—	—	—	—	—
一〇—一四	一、四二三	一、三九五	二、八一八	二	二	二	二	〇・〇	〇・〇
一五—一九	八一九	六二〇	一、四三九	二六七	三三三	二〇〇	一九四	二・〇	〇・四
二〇—二四	二五〇	五五	五七五	五六九	六〇五	一一一	一一一	六・七	六・五
二五—二九	三〇一	—	三〇二	八八五	一、〇七三	七一	四・一	九・九	一一・四
三〇—三九	三一四	二	三二六	一、八三一	一、〇七三	四・一	二・三	一〇・五	一一・〇
四〇—四九	一六六	—	一六六	一、七九八	一、八四五	〇・〇	二・五	一一・五	一一・〇
五〇—五九	六七	—	六七	一、二一〇	一、二六五	二・三	一・三	九・七	二〇・五
六〇—六九	四二	—	四二	一、二一〇	二、四七五	〇・九	一・三	一四・三	一三・五
七〇—七九	九	—	九	七八〇	一、六四一	〇・六	〇・三	九・二	九・二
八〇—八九	—	—	—	三三〇	七六四	〇・一	九・一	三・八	四・八
九〇—九九	—	—	—	四二	一三二	—	—	〇・五	一・〇
總 合	一、三三六	五、五一八	八、八五四	九、三四四	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

初婚年齢は全家族について調査不可能であつたため五一五家七六六組の夫婦を選んで集計した結果は男子は十歳未満のもの一・三%一〇、一四歳が極めて普通の年齢として四〇%を占めてゐるのは注意すべき點である。女子の嫁出年齢は一〇—一四歳が八%一五—一九歳が二%で、これを見ても早婚の風習が強く、殊に男子に於てその割合が強いと云へる。この外に三箇所の大村鎮を選んで三九〇二人について調査した結果によつても、ほど同様のことが云へる。

夫婦年齢差をこの五一五農家でみると、夫が妻より小なるもの六九%、同年齢五・八%であり、妻が夫より年長者の場合はその年齢差少く平均四歳であり、逆に夫が妻より年長者の時の年齢差は非常な差があり平均八歳である。貧農の農家では大體夫が年長者であり、これは多くの男子が婚姻すべき資力を持合せぬためであり、富裕の家族は妻が年長者の場合多いのは、早く娶り得る経済力があるから男子は己よりも年長者の女子を妻とするからである。

四	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
總合	三三	三〇	一九	三六	九〇	五八	三二	一八	四一
									五九

第二子の出生は婚姻後六年以後—九年までに高い。

別に五一五家族九八一人の母について、一四—二九歳、三〇—四五歳の妊孕可能年齢層と、四六歳以上の妊孕年齢経過後の三階級に分ち、その子女の出生数、死亡数、現生存数を示してゐる。これら三組を平均すると母一人當り三・五四人を出産し、一・一八人死亡し、現生存二・四六人となる譯である。

前記の五、二五五家族調査の場合と多少の差異を免れまいが、著者自らもその結論に於て資料としての不完全さを認めてゐる。然し從來の人口資料の不整備に對する試みとしての著者の意圖する所は今後のこの種調査に於てより完全性を示さるべきであらう。

五一五家内、年齢組に照した九八一個の婦女の出産、死亡及び現存子女数と平均毎婦の出産、死亡及現存子女数

婦年齢	總數	出生数	死亡数	現存数	平均毎婦出生数	平均毎婦死亡数	平均毎婦現存数
一四—元	三〇一	六三	一〇七	二七六	一・二七	〇・三六	〇・九三
一五—二	三三	一、四三	四三	九八	四・三〇	一・二六	三・〇四
三以上	三六	一、七四	六六	一、三三	四・七六	一・六八	三・〇九
總合	九八	三、四七	一、五七	二、九〇	三・五〇	一・二八	二・二二

ブルグドエルファア著「第三帝國に於ける人口發展」

ブルグドエルファア著「第三帝國に於ける人口發展」

Friedrich Burgdörfer, Bevölkerungsentwicklung im Dritten Reich, Tatsachen und Kritik 1938

「一國民が其の姿勢をかゝるも急速に轉換することが可能であるとは私は未だ考へ及ばなかつた」とはナチス政權樹立後の獨逸人口現象の好轉について嘗て米國農務省著名の高等農業經濟官 O. E. Baker が本冊子の著者獨逸統計局長ブルグドエルファア博士の報告を手にして語つた讚嘆の言葉であるが、本冊子はこの海外の識者にも感嘆と共に抄からざる希望をも與へた政變直後の獨逸人口現象好轉の跡を更に詳細に紹介したもので、もと著者の舊著『青年なき國民』第三版の附録として執筆せるものを別冊單行本として出版せるもの、筆者が茲に本誌上に紹介せる同著者の別著『白色民族は滅亡するか』にとつても同様追加附録として茲に紹介するに足らうと思ふ。尤も本冊子に取り扱はれてゐる内容は主として三三、四年と三五年の一部で聊か舊聞に屬するものではあるが、人口問題研究上モヌメンタルな一個の古典的事實としてその報告を邦語文獻の一部に止めてをくのも強ち無駄ではなからうと思ふ。

著者は本著主題に立入るに先立ち簡勁達意の筆を以てナチス政權樹立當時の獨逸人口現象の國民的危機について語つてゐるが、いまその中から特に標本的な數字を擧げてみると獨逸全國の出生總數は次の如くで、

一九〇一年 (當時の領域内、人口五千六百萬)	1,031,000人
一九三二年 (大戰後の領域内、但し人口は六千五百萬)	1,031,000